

作文 高校生の部 最優秀賞

幸せの青い空

高校二年

佐伯

理奈

昼下がりの電車内は空いていた。SNSだったか、英単語のアプリだったか、何を見ていたのかは覚えていないが、私は座席でスマホを眺めていた。とある駅で乗車したおばあさんがスマホ越しに見え、その人は私の横に座った。車内は空いているのに、なぜ私のすぐ横に座ったのだろう。ちらっと気になったが、すぐに私の意識はスマホの画面に戻った。しばらく時間が経ち、

「今日は青空が綺麗ね。」

とおばあさんがつぶやいた。声に反応した私はすぐにスマホから顔を上げて、向かい側の窓を見た。座席には誰も座っていないため窓枠が額縁のようになり、冬直前の晴天の空が一枚の絵画のように現れた。金や銀の粒子が混ざっているかのような輝く青空が高く、遠く広がっていた。

「わあ、本当に。」

私は思わず口に出した。そして、持っていたスマホのカメラで写真を一枚撮った。

「上手に撮れた？」

おばあさんは私に問いかけた。私はおばあさんに画面を見せながら、「はい、綺麗に撮れました。」

と答えたものの、じっと画像を見て、「でも、実物の方が何倍も素敵ですね。」

そう付け加えた。目の前の青空は光のニュアンスも加わり、繊細な色合いで立体感もある。撮影した青空もきれい綺麗なのだが、迫力がある本物の美しさには追い付いていなかった。おばあさんは笑い、「そうね。私たちの目はカメラよりも高性能なのよ。」

とおっしゃった。その言葉が私にふっと刺さった。「そうかもしれない。良いことを教えてもらったな。」と思った。美しい青空を見ながら、おばあさんは電車に乗る前からこの絶景に気付いていて、特等席に座っ

たのだと感じた。その前から特等席に座っていた私は気付いていなかったのに……。電車内で見ていたスマホの内容は覚えていないが、あの日の青空は今も心に焼き付いている。

その出来事をきっかけに、私は素晴らしい風景に出会うチャンス逃すまいと電車の中ではなるべくスマホを見ずに過ごすようになった。小学校から同じ路線で通学している私にとって車窓の景色は見慣れたものだと思っていたが、それは違っていた。新しいマンションが建っていたり、商業ビルに私の好きなお店がオープンしていたりと目を引く変化がいくつもあった。一方で、小学生の頃にこっそりあだ名を付けた住宅が変わらずに、あのときのままの姿で建っているのを見かけて、旧友と再会したような懐かしく、嬉しい気分も味わった。優しい光が帯びる早朝の空も、燃えるように赤い夕焼けの空も何度も見た。

車外の景色ばかりじゃなかった。私が持つ高性能な目は、車内の様子もつぶさに捉えた。座席を必要としている高齢者や乳幼児を連れなお母さんに席を譲ったり、車いす利用者の乗降を手伝ったりした。外国人観光客が車内の路線図を見て肩をすくめているのにも気付いたので勇気を出して話しかけた。目で情報をキャッチすれば、体が自然に動いた。「当たり前のことをしただけ。」と澄まし顔をしていても、お礼の言葉をいただくたびに心が温かくなった。

あるとき、視覚障がい者用の白杖を持った女性が乗車し、ドア近くに立っているのが見えた。その姿になんとなく違和感を覚えたのでよく見ると、女性のブラウスからハーフパンツにかけて濡れていた。私は、「お洋服が濡れています、どうされましたか？」

と女性を驚かせないように落ち着いた声で話しかけた。そして、私が座っていた席に案内した。事情を聞いたところ、女性は電車に乗る直前に男性とぶつかってしまった、その人が持っていたと思われる飲み物が上半身にかかってしまったそうだ。濡れているのは気付いたが、電車がホームに到着したこともあり、そのまま乗車したらしい。

「それは大変でしたね！ちょっと拭きますね。」

私はそう言って、通学用リュックからハンドタオルとウェットティッ

シユを出して拭き始めた。女性にかかってしまったのは、水ではなくコーヒーのようだった。

「母が心配性でバックの中にいろいろ入れるんです。役に立ってよかったです。」

「ぶつかった相手が男性なら、女性に対してお洋服を拭きますって、なかなか言い出せませんよね。」

などと明るく声をかけながら、女性の服にタオルを押し当てた。女性は私に謝罪とお礼の言葉を交互に口にしてしたが、そのうちに涙声になった。その日はアンラッキーがいくつも重なったそうだ。何もかもが嫌になってしまったと下を向いた。しかし、つらさを吐き出すと穏やかな声になり、

「一人で出かけるときは車内ではいつも立っているのですが、今日は座れちゃいました。ラッキーですね。ありがとう。」

と微笑んだ。洋服に付いていた濃い茶色のシミがタオルに移ったように、女性の心の中にあつた悲しみのシミも少しだけ薄くできたように感じた。女性のトラブルにすぐに気付いて良かった。ちよつとでも痛みに寄り添うことができて良かった。心からそう思った。

スマホは便利だ。移動時間に仕事や勉強をしたり、趣味に浸ったり、どこにいても自分の世界に入ることができるスマホは私たちの生活に欠かせないものだ。しかし、公共交通機関を利用するときは、私たちは公共の一員であることを忘れないでおこう。電車やバスに乗るとすぐに自分の世界に入ってしまうかつての私のような人がいるならば、どうかスマホから顔を上げて欲しい。目配りと気配りを心がけて欲しい。スマホのカメラよりも高性能な目で周りを見て欲しい。座席が必要な人を見つけれられるかもしれないし、サポートを求めている人の役に立てるかもしれないのだから。

多くの人は元来、世話好きで誰かの役に立ちたいと考えていると私は信じている。子どもころは家族や先生のお手伝いを買って出ていたのに、いつのまにか「手伝いを申し出て、相手に断られたら気まずい。」や「良い人ぶっていると周りに思われたら嫌だな。」などと気にして、

自分の意識と行動にブレーキをかけてしまっていないだろうか。そんな些末なことを気にする必要なし、だ。他者を思いやっつての行動だったら、もし断られたとしても構わないじゃないか。見て見ぬふりをしなかった自分を称えよう。「電車やバスの中でスマホを見ないようにする程度のちっぽけなことでは世界は変わらない。」と言う人もいるかもしれない。しかし、公共の場での自分を自覚するという意識改革と、目配りと気配りをするという行動改革をする人が増えたらどうだろう。きっと、今よりも他者との心の交流が盛んな温かい社会となり、より良い世界づくりにつながっていくのではないだろうか。

モリス・メーテルリンク作の「青い鳥」は、幸せを呼ぶといわれる青い鳥を探しに旅に出る兄妹の物語だ。兄妹は長い旅の道中で青い鳥を見つけられずに帰宅するのだが、ふと見ると家の鳥かごの中に探していた青い鳥がいることに気付くといったストーリーで、幸せはあなたすぐ近くにあるというメッセージが込められている。私の中で、あの日の青空と青い鳥のイメージが重なっている。そう、幸せは手が届くところにいつもある。幸せな世界を作るヒントもそこら中に散りばめられている。自分が成長する、感動する出来事も目の前で起きる。私はそんな気がしているのだ

作文 高校生の部 優秀賞

文化交流を通じた幸せの創造

高校一年

坂田

知歩美

文化交流を通じた幸せの創造

高校一年 坂田 知歩美

世界には多様な文化があります。異なる国々で様々な民族が、独自の言語、宗教、伝統を持ち、それぞれの文化の中で生活をしています。そして、直面する課題や問題も様々です。しかし、多くの人々が「幸せ」を共通の目標としています。そのような背景を踏まえ、文化交流は世界の「幸せ」を形にするための重要な役割があると私は思いました。文化交流は、異なる国や地域の人々がお互いの文化や習慣を共有し、理解しあうことが出来る大切なことだと思えます。異文化に触れる機会だけでなく、相互理解を深め、共感の絆を作ることにも可能です。私は、文化交流の意義、効果的な方法、そして私達一人一人が出来ることは何かを考えました。

まず、文化交流がもたらす意義を考えました。異なる文化を学ぶことで、私達は世界観や価値観の多様性に触れる機会を得ることが出来ます。そして、この多様性を受け入れることで、偏見や差別、対立を減らし、相互尊重ができると思います。また、異文化を理解することで新たな視点や知識を得られ、自分自身の成長にも繋がります。さらに、異なる文化を持つ人々との交流は様々な人間関係をつくり、国際的な協力の基礎となり、平和が進んでいくと思います。

次に文化交流のための具体的な方法を考えました。異文化を理解するための学習や体験です。言語学習や文化イベントへの参加、海外留学や、ホームステイなど、様々な形で異文化との接点を持つことが可能です。また、インターネットの進化によりオンラインでの交流も可能となりました。SNSやビデオ会議などを活用し、異なる国や地域の人々と交流することも容易に出来ます。しかし、すべての人々にとって必ずしも簡単に出来ることとは言えません。実際、私は他国文化に興味があります。が、他国の言語が話せない為、いざやりたいと思っても勇気を出すことが出来ません。そこで、友人と一緒にホームステイや海外修学などを体験したり、クラスメイトと共に他国の学校と交流するなど、私のように

一人では勇気が出ない人でも、様々な制度やイベントを利用することで、交流することが出来ると思います。

最後に、私達一人一人に出来ることは何か考えました。まずは、自身の他国文化に対する偏見や固定観念に向き合うことが大切だと思います。そのために自分の国の文化を誇りに思ったうえで、他国の文化も学び尊重し、理解しようとする必要があります。

異文化を持つ人々とコミュニケーションを積極的にとり、意見交換や対話を通じて相互理解を深めていくことが重要です。私達が互いの違いを認めながらも、共通の目標である世の幸せを形にする第一歩となると思います。

作文 高校生の部 優秀賞

僕と世界の幸せ

高校二年

東山

幸志郎

あなたの幸せは何？世界を幸せにするのは何だと思う？僕はその答えを知らないし、正解なんてないと思う。

僕が昔小さかった頃、母が僕のせいで知らない人に怒られたことがあった。でもそんな時、母は僕に笑顔で大丈夫だからねって言ってくれた。初めての経験に怖がり泣きそうだった僕の心を母はあたためてくれた。

ちょっと口角を上げるだけで、ちょっとにこってするだけで、この世界はちょっとだけあたたかくなる。

中学二年生の頃の担任の先生が嫌いだった。空手の有段者で大きくて怖そうだったから。びっくまさんってあだ名つけてたし、担任が決まった時は正直ショックだった。

ある日の放課後辛いことがあって誰もいない教室で一人泣いたことがあった。その時、たまたま通りかかったびっくまさんが泣いてる僕を見て言った。「俺はお前が何に悩んで苦しんでるのかわかんねえけど、とりあえず思いつきり泣いたら笑え、辛い時こそ笑え。」

その時はうるさいお前に何が分かるんだよって思った。その年にびっくまさんは定年退職した。お別れ会の時にびっくまさんは泣きながら言った。「お前ら泣きたい時こそ笑えよ！」って泣きながら。気が付いたら僕も泣いていて、びっくまさんがいつも笑顔だったのを思い出した。

優しい人はいつも笑ってて強い人もいつも笑ってる。でもそう見えるだけだと思う。きっと陰ではそういう人たちも苦しんで悩んで泣いてる。みんなの前で涙を見せず、ずっと笑顔でいれる人が強い人だと思う。笑顔って不思議だ。

あなたが笑うとあなたも幸せな気持ちになって、隣にいる誰かも幸せな気持ちになる。あなたは強がりや本当に面白くて笑っているだけかもしれない。でも、あなたのその何気ない笑顔が誰かを救ったり幸せにし

たりする。

だから笑おう、どんな時も。

言葉がわからない赤ちゃんとも、耳が聞こえない人とも笑顔っていうコミュニケーションはいつでも出来る。そしてそのコミュニケーションは人と人とを繋ぐ架け橋になる。

僕はそんな言葉のいらないコミュニケーションが好きだ。

今世界では紛争や飢餓、貧困に苦しんでいる人がたくさんいる。今の僕はお金も権力も何もないけど、遠くで困っている僕とは違う言葉を話す人たちが助きたい。お前なんか出来るわけないって周りに笑われるかもしれない。でも、きつといつかこの世界を笑顔と幸せでいっぱいしたい。

それが僕と世界の幸せだって思うから。

作文 高校生の部 審査員特別賞

今の私にできること

高校一年 芦澤 桜將

今の私にできること

高校一年 芦澤 桜将

私が世界の幸せをカタチにするためにできることは「知る」「伝える」だと考えます。なぜなら、学生に出来る範囲には限りがあるからです。

私は中学の時「SDGsの十七の目標から一つ選び、調べて、発表をしないさい」という授業がありました。当時私は、SDGsについて詳しく知っておらず、食えることが好きだからという安直な理由で二番目の目標「飢餓をゼロに」について調べました。そこで私は衝撃を受けました。世界には食料が入らない人が約三十パーセントいるのです。

その問題解決のために何が出来るだろうと調べてみると、商品を適正な価格で継続して買い取ることで、生産者が自立できるように支援をする「フェアトレード」というものがありました。さらに、貧困問題にもつながる素晴らしい手段なのです。

飢餓や貧困を解決するための手段の一つである「フェアトレード」を知り、活動に参加しようと思いました。しかし、当時中学生である私も現在の私にも大きな欠点があったのです。それは稼がないことです。「フェアトレード」は消費者のデメリットとして価格が高いのです。親に頂いているお金で無駄に高いものを買うことはできません。

私が考えた結果、稼ぎのない学生で出来ることは「知る」「伝える」ことだと思いました。その問題や解決策を知り、誰かに伝えれば間接的に携われます。

例えば、親と買い物をしている際にフェアトレード商品を買った方が良い理由を伝えれば、授業で知った知識は無駄ではなく、間接的に関わることが出来るのです。

そして、学校のプレゼンテーションや友達とのディスカッションを通じて、社会問題について共有します。これは、互いに理解を深めるために非常に大切です。

また、地域のイベントやフェアなどに参加することも有効だと思えます。地域の方々に伝えることで家族という小さい集団だけでなく、地域

というより大きな集団に影響を与えることができるからです。

「知る」「伝える」行動は非常に小さく、影響が少なく感じるが、そのような行動が将来大人になった時に世界の平和のため行動へと変化していくと思います。現在は小さな行動でも将来、今よりもっと大きな行動をするための基盤を作るのです。

高校生の私に出来ることとして、「知る」「伝える」は最も重要なことであり、平和への第一歩だと思います。

作文 高校生の部 審査員特別賞

通学スリル満点

高校三年

坂田 龍一郎

私は世界の幸せの実現のため、道路交通の改善に貢献したいと思っています。ジョンFケネディは言いました。「交通事故は最も重大な公衆衛生上の問題だ。」と。確かに、どんな幸せな人生を送っていても、移動中の事故でその幸せが奪われてしまっただけでは意味がありません。

さて、私は初めに「道路交通の改善」を目標にかかげましたが、国によってかかえる交通問題は違います。しかし今回のテーマは「第一歩」のため、私が解決したい日本の交通問題について論じます。

私が日本の道路交通において最も大きな問題だと思うのは、自転車の無秩序さです。日本の自転車乗りの多くは信号無視、一時停止無視、逆走等の違反行為を繰り返しています。違反だから問題なのではなく、そのような身勝手な運転のしわ寄せが、一部の善良な自転車乗りに来るのが本当の問題です。彼らの無謀運転は周りの人や車両に無駄なアクションをさせるため、事故の潜在リスクが上がるのです。

しかし残念ながら、この問題の解決のための対策は不足しています。例えば学校の規則書には「交通ルールを遵守すること」と記載されていますが、生徒たちは交通ルールを教えられたわけではないので効果はありません。また私の高校では、通学時間中に先生達が校門にて女子生徒のスカート丈をチェックしていますが、そんなことより校外の人の身を危険にさらす自転車通学校の指導を優先すべきだと感じます。校門から五十メートル歩いて信号無視が多発する交差点に立つのがそんなに面倒なのか疑問です。

この問題の解決には日本の交通教育を充実させることが理想ですが、「第一歩」としては現実的ではありません。そこでまず武蔵野大学高等学校を「自転車模範校」にすることから始めたいです。具体的には、危険地帯の見張りや強化、独自の車検実施、ルール違反常習者の自転車通学権剥奪をしたいです。

これを機に日本が自転車先進国として世界に手本を示せるようにな

り、安心した生活を送れるようになることを願います。

作文 高校生の部 審査員特別賞

幸せへの第一歩

高校三年

酒折

和奏

幸せの定義は人それぞれだ。しかし、それらはある土台の上に成り立っている。土台とはつまりある程度恵まれた環境のことである。では、主語を世界にした場合はどうだろうか。私は、世界中の人々が互いを認め合えている状況こそが幸せになるための基盤にふさわしいと考えている。国同士の不和や人々が抱く敵対心、差別的偏見は確かに国籍や人種で人間を分断し、戦争の引き金となる事もあった。ではどうすれば幸せに一步近づけるだろうか。

七歳の頃、一年間アメリカで過ごす機会があった。公立校に通っていた私はそこで様々な国籍の同級生に話しかけ仲良くなり、特にその事に違和感も感じなかった。相手もそうだったらしく、まともに英語も話せない私に優しく接してくれた。今考えると一体どうやって会話していたのか不思議だが、当時の私達には確かに幸せな空間があった。

日本に帰国してから気付いた事は、全ての人がこの事にいい印象を持つわけではない事だ。同じクラスだった生徒に一番仲の良かった中国人と韓国人の友達のことを話した所、予想とは大きく離れた返答が返って来た事がある。「どうして友達になろうと思ったの？」クラスメイトはこの二つの国に対して良い印象を抱いておらず、日本の物や日本人のデータを盗んでいるから近寄らない方がいいと話した。これを聞いていた他の生徒たちも会話に加わり次々に話し出すので遂に私は何も言えなくなってしまうた。なぜ生まれた国が違うだけでこのような悪いイメージを持たれるのか、どうしたら先入観にとらわれず仲良くやっていけるのか疑問に思った私は、その答えを探すためにもう一度海外に行きたいと思うようになった。

その機会は高校二年生の夏に訪れた。コロナ禍の中、選択肢が制約される中でたどり着いたのはカナダだった。

この選択は私に新たな挑戦を与えてくれた。価値観やバックグラウンドが大きく異なる人と慣れない英語で話すことは難しく、特にホストマ

ザーとの関わり方に苦戦した。アジア人と今まで関わりの薄かったギリシャ人の彼女は日本に対して偏見を持っており、「他のアジア人のように日本人も虫を食べたり薬物を輸出しているんでしょう？」と言われる事もあった。否定しても「隠さなくてもいいのに」と言われるばかりで一向に受け入れてくれず、ショックを受けた。カナダは多様性を尊重し差別なども少ないイメージがあったので驚きもした。しかししばらく経ってから思い返してみると、私がカナダに住む人に抱くイメージも一種のバイアスなのだという考えに行き着くようになった。相手がアジアに対する先入観だけで接してきたように、こちらもまたカナダに対する先入観だけで勝手に期待し失望していたのだ。それから私はホストマザーと話し合い、休日は一緒に日本料理を作ったり日本の動画を見るようになった。同時にカナダやギリシャの事も色々と教えてくれるようになった。そして帰国する一週間程前に、「いつか日本に行ってみよう」と言っていた事が今でも印象に残っている。あの時確かに私は彼女とのきずなを感じた気がした。今思うと、ああいった事を幸せと呼ぶんだろう。

私の経験は、異なる文化や国籍を理解し、対話を通じて互いを知っていくことが、私たちが歩むべき世界の幸せへの一歩であると示している。これからも、背景の異なる人々との交流を通じて、対話と理解の架け橋となる存在になっていきたい。私の一歩が、世界中の人々が互いを尊重しあい、共に幸せを築くためのきっかけとなる事を願っている。

作文 高校生の部 審査員特別賞

プラスアルファの行動

高校二年

後藤田 真央

プラスアルファの行動

高校二年 後藤田 真央

私は、プラスアルファの小さな行動が世界の幸せをカタチにするための第一歩になると考えます。「塵も積もれば山となる」となる言葉があるように普段は本当に小さなプラスアルファの行動だったとしても毎日続けていくうちにとても大きなものに繋がると思えます。私が普段しているプラスアルファの行動を三個挙げたいと思います。

一つ目は、清掃時間のプラスアルファです。科学実験室が清掃分担場所だったときのことを例に挙げたいと思います。床を掃いたり、椅子をあげたりするうえに、プラスアルファで机を拭いたり、実験道具を少し片付けたりするなどの行動をしていました。この行動を続けることで大掃除のときに少し余裕ができ、焦らず掃除をすることができたり、他の分担場所の手伝いができたりするなど後に小さな幸せがやってきました。

二つ目は、宿題のプラスアルファです。宿題をすることに幸せを感じる人は少なく、むしろ苦手だと思う人の方が多いと思います。私もそうです。だからこそプラスアルファの行動をすることで幸せに感じることはありません。数学の宿題が多い時、一日の間ですると決めていた宿題の量プラス一問を解くことで、明日する量が減り心に余裕ができたり、プラスアルファを毎日重ねていくことで予想以上に早く宿題が終わったりするなどの小さな幸せがやってきました。

三つ目は、考え方のプラスアルファです。その考え方とは「どうせするのだったら」です。「どうせするのだったら」と聞くとマイナスなイメージを持つかもしれません。しかし、「どうせするのだったら」適当ではなくきちんとやろう」や、「どうせするのだったら今のうちに終わらせておこう」と考えるとプラスなイメージを持てると思います。この考え方は中学生時代の先生に教えてもらい、私の行動が変わりました。先延ばしにしてしまいがちだった私ですがこの考え方をもってからは、「どうせするのだったら早く終わらせよう」と思い、先延ばしにしてしまいが

ちだった性格が少し治りました。

このように小さなプラスアルファの行動を重ねることで後に幸せがやってきます。プラスアルファの行動は自分に余裕がないときにするのは難しいと思います。しかし、自分に余裕があれば、周りもよく見ることができ、プラスアルファの行動もできると思います。一人一人のプラスアルファの行動は小さいものだけれど、世界の人々がプラスアルファの行動を続けることで世界の幸せをカタチにする第一歩になると思います。